西鶴の海と舟の原風景

『西鶴大矢数』にみる地方談林文化圏の存在

森田雅也

一　はじめに

西鶴作『西鶴大矢数』（延宝九（一六八一）年刊）は、延宝八年五月七日、大坂生玉社南坊に聴衆数千人を集め、西鶴二度目の矢数俳諧興行として、その折りの独吟一日四〇〇〇句を収めている。各十百韻ずつ四巻とし、その後に諸俳人から寄せられた句を取りまとめ、最後の一巻に表八句六七組を追加として、記載して上梓したものである。西鶴そして、談林俳諧の題材・付合の技法を知るには、格好の連句集といえよう。もっとも、この原版本は惜しくも関東大震災の際に焼失しているが、その写本伝本については、野間光辰氏の『定本西鶴全集　第一一巻下』（中央公論社、一九七五）「解説」に詳しい。したがって、最も信頼できるテキストとして、本稿でも底本としているが、氏の懇信の水田西吟の異体字等を含め、私に清濁を付し、現行文字に直している。また、本稿では『西鶴大矢数』は刊行物を指し、「西鶴大矢数」は延宝八年の独吟四〇〇〇句の俳諧興行を指すものとして区別している。

さて、『西鶴大矢数』について野間氏は、同書の「解説」に

西鶴矢数俳諧の発企が、俳諧における天下一をめざしてのことであったこと、（中略）外は貞門俳士の疎外・非難、内は同門俳士の嫉視・競争に対する、一種の示威であった。然るにその後、紀子の千八百句独吟、梅睡改め三千風の三千句独吟等、続々西鶴の記録を更新するに至って、改めて西鶴は二度の大願として四千句一夜一日の独吟を思い立ったのであった。当日その席に臨んで、師の宗因が第一「何泰平」百韻に「八まわりましの名を上て」と祝意を表し、また「日本第一前代之俳諧の性」と世上に申し渡したとは、西鶴が鳴海の下里知足に書き送るところである（傍点は森田）。

と評価され、西鶴文学史に位置づけている。

本来「矢数」は、三十三間堂の通し矢として、その矢数を尾張藩士浅岡平兵衛、同じく尾張藩士星野勘左衛門、紀州藩士和佐大八などが新記録をたて、レコードホールダーを争った当時流行の興行のようなもので、その評価は武威の誇示にあったであろう。

もちろん、西鶴も「聴衆数千人」の前で鮮やかな俳諧独吟興行を行ったわけであるから、「西鶴大矢数」というパフォーマンスによって、公的に内外に大坂談林に西鶴ありと標榜し、その地位を確固たるものにしようとした意図があったことは否めない。当時の人々、特に全国の談林俳諧の「同門俳士の嫉視・競争」、「貞門俳士」の談林批判を黙させるには、十二分に効果的な方法ではなかったのではあるまいか。

もちろん、「西鶴大矢数」が「西鶴の記録を更新」した人々、これからも更新しようと挑戦する人々に対しても「一

種の示威」を目論んでいたことも事実であろう。しかしそれのみが目的とすれば、西鶴は「矢数」俳諧の数の記録を競うだけの、独吟レコードホールダーとしての偏執狂にすぎないことになってしまう。

ただ、談林俳諧は、洒落・滑稽・機知を旨としてある種の技法を持っている。歌に本歌取りという技法があり、小説に翻案という技法があり、音楽にアレンジという技法があるように、その談林風、いやそれを超えた「西鶴風」の技法を用いれば、いともたやすく一日四〇〇〇句ぐらいは詠めるとする技法のお披露目としての役割が「西鶴大矢数」にはあったはずである。これをもって当日の大多数の聴衆は、「天下矢数二度の大願四〇〇〇句」を詠みきった西鶴に「ことばの魔術師」（本書の趣意ではない）を実感したことであろう。さりながら、矢数の気運がおさまらない。句数の記録樹立だけを意図して詠まれる矢数俳諧興行は、貞享元（一六八四）年六月、住吉社での一昼夜二万三五〇〇句の西鶴の記録樹立を待たねばならない。西鶴はこれによって、句数を争うだけの矢数狂想曲に、自ら終止符をうった、そのように一連の西鶴矢数俳諧興行をみるべきであろう。

それは談林俳諧の真骨頂を軽妙な即吟、世間評の「軽口」による句数生産だけで捉えられたくないとする宗因の意志、遺言であったのかもしれない。したがって、「西鶴大矢数」の時点において、「師の宗因」から「日本第一前代之俳諧の性」とされた祝辞に対する、西鶴自身の歓びの極みも、速吟にもかかわらず四〇〇〇句の完成度が高かったところにあったのではなかろうか。

ただし、西鶴のそれは従来の俳諧とは違うと宣言する。「今世界の俳風詞を替品を付、様々流儀有といへども、元ひとつにして更に替わる事なし。惣而此道さかんになり東西南北に弘まる事、自由にもとづく俳諧の姿を我仕はじめし已来也。世上に隠れもなき事、今又申も愚か也」（『西鶴大矢数』自跋）なのである。

したがって、『西鶴大矢数』の本質を知るには「自由にもとづく俳諧」とは何かを解明するところにある。とはい

うものの、四〇〇〇句はあまりに多い。そこで試みに挙句に向けての三句をとりあげたい。長い四〇〇〇句を詠み終わるわけであるから、談林俳諧の特色とも言うべき連俳手法「心づけ」、西鶴独自の「こゝろ行の付けかた(『西鶴大矢数』自跋)」を最高限に示し、称揚しているはずだからである。

(御出入の外にすあひを呼にやる)
舟が急がざなに成とまた　(名残裏六句・傍点は森田。以下同じ)
これ迄の花は奢の難波鶴　(名残裏七句)
長き日の出や何れもの影　(挙句)

前田金五郎氏の『西鶴大矢数注釈』(勉誠社、一九八七。以下便宜上『前田注』とする)によれば、以下の句意となる。

・(前句を、御出入の商人の外に、牙婆を呼びにやるが、と解して)、御客さんの、「舟が出るのを急がなければ、なんでもさらに、ご用命ください」、と挨拶する。
・(前句を、「舟の出るのを急がなければ、どんな御用でもどうぞ」と挨拶すると、解して)、今迄に名残の花の句を四〇も速吟したのは、分不相応の難波に住む鶴、即ち私の分不相応の贅沢ですよ。
・(前句を、今迄の名残の花の句を、四〇も速吟したのは、分不相応の贅沢であったよ。この難波に住む鶴、即ち西鶴にとっては、と解して)、そして、この四〇〇〇句興行の挙句を詠吟する時は、春の長い昼間の始まり

の、日が出て、ここに列席すの皆さんの影法師が長い時刻であろうか。

連句の句意として、逐語訳は右のようになろうが、些か、西鶴独吟四〇〇〇句の大団円の熱き思いが伝わってこない。それは「名残裏六句」の「舟が急がざなに成とまた」の句意が前田氏も含めた我々に秘鑰となっているからではなかろうか。

『前田注』で「舟が急がざ」の語注を「舟が出るのを急がなければ」としているように、この語は打消の仮定を表わしており、一句の句意は「舟が出るのを急がないなら、また何でもご用命ください」となる。しかし、それを『前田注』では誰への「挨拶」の言葉としているのであろうか。どうもわかりづらい。それに西鶴自身が「分不相応の難波に住む鶴、即ち私の分不相応の贅沢ですよ。」と自虐的に謙遜しているような解釈とする根拠もわからない。

むしろこの一句は、西鶴から「舟が急がざ」と、舟に乗ろうとしている人を呼び止めて、「何成とまた」と挑発的に呼びかけた言葉と解釈してはいかがであろうか。

そうすると、「これ迄の花は奢の難波鶴」の句は、「(皆様のお帰りの舟が急がないというなら、何なりともまた句を詠み続けますよ。)何しろ、ここまで花の定座を四〇回も詠んできたことを自負している難波の西鶴ですからまだまだ詠めます。」という挑発的な言葉と解し、余力を残しているという自慢げな戯れ言と解釈してはいかがであろうか。

しかし、日の入り時は迫っており、詠み続ける時間はない。「長き日の出や何れもの影」の句意は、「日の出を見たときから長い時間が経ったことだ。皆様の面立ちもはっきりせず黒い影にしか見えない時刻となりました。長い間おつきあいいただきありがとうございました。名残は尽きませんがここらで本日はお開きにいたしましょう」と来

場した野外の聴衆の一日を労って挙句としているのではあるまいか、と新たな句意を提案したい。

西鶴自身の『西鶴大矢数』巻一第一の発句が、

天下矢数二度の大願四千句也

である以上、本来、この日の大矢数興行は目標四〇〇〇句、つまりは四〇〇〇句をもって、終了することは聴衆も立ち会いの役人なども納得のはずである。ところが、巻二第一五の「矩貞」の発句は、

日は遅し三千世界四五千句

となっている。『前田注』の句意は、

・春の日は暮れるのが遅いので、この大矢数興行も、三千世界の森羅万象を詠み込んで、目標の四五千句は達成するであろう。

である。いかにこの日の西鶴独吟のペースが速く、途中、四〇〇〇句を上回る勢いであったかを伝えてくれている。かかる発句をみても、右の解釈は成り立とう。

ところでこの挙句の謝意は打越ながら、「舟に乗ろうとしている人」、すなわち、舟で駆けつけてきてくれた俳人

たちにもむけられていないのであろうか。川舟、あるいは海舟から川舟を乗り継いで集まってくれた遠方の俳友、老若の矢数興行の役人の方々への感謝の句となっていると解釈するのである。その場合、謝辞は無理でも「舟」に関わる人々に呼びかけている可能性は否定できないはずである。そう考えると、「舟」はやはり、『西鶴大矢数』にとっての秘鑰の言葉である。

実際、『西鶴大矢数』の自跋だけでも「山海を飛び越え」「海は目前の硯」という表現があるように、存外四〇〇〇句の中に「舟」「海」に関わる句は多い。「西鶴大矢数」の一々の句は速吟という方法から、西鶴の無意識のうちに発した言葉が連珠され、瞬時に詠み出されたものである。とすれば、「海」「舟」などという言葉を持つ句は、俳諧師であり、後の浮世草子作家となる西鶴にとって、心の原風景を瞬時に表出したものではなかろうか。以下で検証するものである。

二　西鶴の海船への造詣と原風景〈弁才船〉

西鶴は舟の利便性を愛し、その運用法を熟知し、詠み込んでいる。

後年の『日本永代蔵』(元禄元(一六八八)年刊)巻二の五で、

世に船ほど重宝なる物はなし

としているが、この「世」とは、河村瑞賢が西廻り航路を開発した、寛文一二(一六七二)年以降の海運謳歌を讃え

ているのではあるまいか。この章では、山形酒田の廻船問屋「鐙屋」の栄える様を描いているが、「昔はわづかなる人宿せしに、その身才覚にて近年次第に家栄え、諸国の客を引き請け、北の国一番の米の買入れ、…」と一章まるごと酒田の繁栄に割いている。その西廻り航路の開発とともに歩んだ酒田湊の急激な変容は、西鶴作品の随所に、年代も定かに正確に叙述されている(拙稿「西鶴浮世草子の情報源―「米商人世之介」の側面からの一考察」拙著『西鶴浮世草子の展開』和泉書院、二〇〇六年)。

その一方、従来の北前船の大坂廻米コースである、敦賀→琵琶湖→淀川コースは衰退し、『日本永代蔵』では敦賀で衰退する話が、巻四の四、巻六の一にある。琵琶湖の大津も巻二の二に登場するが、そこには東海道の宿場としての賑わいが描かれ、富裕層より貧困層を描いていることから、舟の恩恵から外れていく実状を描いている。

そのような観点から見れば、『日本永代蔵』巻四の二冒頭で

時津風静かに日和見乗り覚えて、西国の一尺八寸といへる雲行も三日前より心得て、今程舟路の慥かなる事にぞ。世に舟あればこそ一日に百里を越し、十日に千里の沖をはしり、万物の自由を叶へり。

と舟の着実な運行性と利便性を大いに讃え、

されば大商人の心を渡海の船にたとへ、…

と大商人の心を渡海の舟にまで準えるのは、西鶴が「舟」での「渡航」に成功の夢を預けていたからであろう。そ

れは『日本永代蔵』巻一の三「浪風静かに神通丸」において、

近代、泉州に唐金屋とて、金銀に有徳なる人出来ぬ。世わたる大船をつくりてその名を神通丸とて、三千七百石つみても足かろく、北国の海を自在に乗りて、難波の入湊に八木の商売をして、次第に家栄えけるは、諸事につきてその身調義のよきゆゑぞかし。

とし、北前船の廻米で成功した「唐金屋」という実在の豪商唐金屋庄三郎を絶賛しているところからも窺える。『西鶴大矢数』でも

運は天に命は海に舟の上　（巻一第三）
心がすはつて大舟にのる　（巻一第四）

とあり、命をかけての舟での渡航に憧れに似たものを持っていたことが随所の表現からにじみ出ている。

たとえば、西鶴浮世草子の嚆矢『好色一代男』（天和二（一六八二）年刊）の最終章において、世之介は女護が島を目指して、舟に乗り旅立っていく場面で終わるが、それもこの類いとしてよかろう。

しかし、この終章の船出は、破天荒な好色男「世之介」の顛末として、その女護が島渡りの意義ばかりが論議され、渡航の現実性について未だ問題視されていないが、それは単なる好事家仲間の無謀な船出ではなく、当時の廻船の実態に即した描写なのである（前掲拙著「第一章　六「米商人世之介」としての「女護の嶋わたり」）。

そのことは、西鶴自筆の最終章挿絵に、舳先に日和見に立つ人を置き、正確な弁才船を画いていることだけでもわかる。おそらく、西鶴は想像以上に、船に対する造詣が深かったのであろう。

周知のように「弁才船」とは、この当時の北前船(樽廻船・菱垣廻船)を含む千石船などに用いられた船種名の一つである。

この点は遡る『西鶴大矢数』の時点でも大いに確認できる。

『西鶴大矢数』巻三第二二では、「楠」と「二重底」である。

(楠がおぞひ事共工みてば)
二重底なる舟の行末
浪の声幽に消て形はなし

と詠んでいる。『前田注』の句意は

・(前句を、楠が悪賢い事をあれこれ、たくらんでは、と解して)、そのたくらみの一つとして、二重底に作った楠材の舟は、行先どう使われることやら。

・(前句を、二重底に作ってある舟の行先は、どうなることであろう、と解して)、浪の声が幽に聞こえていたが、その音もその舟の姿形も消えて無くなってしまった。

である。後句を「沖つ波の、幽なる声絶えて、船影も人影も消えて見えずなりにけり、あと消えて見えずなりにけり」とある謡曲『俊寛』に拠っている、として解釈されているが、これは御説のままであろう。しかし、「楠」の前句「河内一国なびく草むら」にひかれて、「二重底」まで楠木正成の悪巧みとするのはいかがなものであろうか。「二重底」はむしろ、北前船などに用いていた弁才船の構造を示しているのであろう。当時、千石船などに用い、鎖国下の日本では最大級であった弁才船は、上船梁、中船梁、下船梁を有し、三室構造であった。しかし、日本海海域の北前船に限っては、構造を簡略化し、しかも強度的には優るとも劣らないという合理的な方法として、「中船梁」と「下船梁」とを一材で兼用させていた(石井謙治『和船Ⅰ』法政大学出版局、一九九五、以下同書を『和船』とする)。和船は内部は別として、外部は楠、杉が用いられたので、「楠」は楠木正成ととるより、船の素材ととるべきである。句意は「楠木がおそろしいほど上手く加工され、見事な北前船となった。こんな立派な舟の納入先はどこであろうか。」となろう。『西鶴大矢数』巻一第二にも、

枕わらして楠が胸
二年懸工みて舟を作られたり

とあり、「楠」と「舟」とは付合なのである。

ここで弁才船にこだわれば、『西鶴大矢数』巻一第八で

（雲に雲鉛香合かさねたり）
轆轤をひけば虹かかれる
葛城の山より月はころばかせ

と詠んでいる。『前田注』の句意は

・（前句を、大空には雲に雲が重なり、ここには鉛香合が重ねてある、と解して）、その香合を作るために、轆轤を挽いていると、大空には緒総ならぬ虹が掛かっている。
・（前句を、轆轤をひいていると、大空には虹がかかっていた、と解して）、その虹のかかっていた葛城の山から、その轆轤で月を山下に転がし落とすことだ。

『前田注』の語注では「轆轤」を「轆轤鉋」ととり、右の句意となっている。野間光辰氏の前掲書『定本西鶴全集』の頭注（以下これを『野間注』とする）では、「重い物を牽き上げるのに用ひる滑車」ととっている。しかし共に、このままでは句意不明である。

ところが、これを先述同様、弁才船の構造として考えてはいかがであろうか。そうすると「轆轤」は弁才船の艫側に設置された、帆や伝馬船ほか重量物の上げ下ろしに用いた（『和船』）部位の名称「轆轤舵」を指すことになる。『日本国語大辞典』（小学館）立項「轆轤」では、九つの用例をあげるが、『前田注』は「轆轤鉋」、『野間注』は「滑車」、『和船』は「轆轤舵」の解説となる。句意としては、前句とでは「轆轤」をひいて帆を下ろした際に見える雲と虹

の実景、後句とでは「月の上座」となり「秋」の句となる。さりながら、後句との場合、「轆轤」を「轆轤舵」とと れば、「中国のジャンク舵に近い、羽ヶ瀬船や弁才船にも使用された轆轤仕掛けで回すようにつくられた舵」（「近世の商船―「弁才船」」安達裕之著『日本の船　和船編』船の科学館、一九九八年、以降『船の科学』と略す）。という語釈となり、針路をとり海上を進む船の上より、見えぬものの、虹のかかる辺りに住む奈良葛城の女との別れを思う「恋」の句意にもなろう。ちなみに

（明盲枯たる木をも杖につけ）
世を陟るわざ轆轤挽らん
大石も動く時には動べし　（巻四第三五）

として、「轆轤」の句がある。前句とでは『前田注』の「轆轤鉋」、後句とでは『野間注』の「滑車」ととり、句意は成立するが、この場合の原文「轆轤をひく」に「挽く」と漢字があてられているのにも注目すれば、「轆轤をひけば」は「牽けば」ではないかと提案したい。

三　西鶴の海船への造詣と原風景〈その他の海船〉

ところで、『西鶴大矢数』には他の船種も詠まれている。

（霧の海四十廷立は皆揃へ）
八島の浦へ矢をつくごとく
時に与一扇見懸て罷り出

と巻三第二二の前句には「四十挺立」を詠んでいる。『平家物語』や『源平盛衰記』などで知られていた、屋島の戦いに向かう源義経以下の精鋭を詠み込んでいるが、前句で天候困難な中漕ぎ出す早舟の勇姿、付けて波を切り、あっという間に屋島に着陣した義経一行の勇姿の句、続いて勇姿那須与一と扇の矢の逸話へと続いている。瀬戸内の力強い、息の合った漕ぎ手たちが、競漕競技のクルーよろしく、颯爽と海を行く勇姿の句である。

ここで「四十廷立」は艪「四十挺」で漕ぐ、いわゆる「小早舟」である。この句意を前句が「浅黄にこくもち七夕の布」とあることから、『前田注』は句意を「霧のたちこめた七月の海上を、その紋所の舟印を立てた、四十挺立ての小早は、皆艪を揃えて力漕している」とされている。語注では、「こくもち」と「四十挺立」を付合ととり、「こくもち」の舟印について精査、「筑前福岡城主黒田氏」の「白餅」の旗印とされている。

西鶴と黒田藩との関係については、冨士昭雄氏の『新編日本古典文学全集　井原西鶴集4』（小学館、二〇〇〇年）「古典への招待」に以下のような指摘がある。

西鶴の伝記資料は、意外に少ししか残存しないが、伊藤梅宇の『見聞談叢』から紹介しておきたい。（中略）「黒田候」とは、福岡藩主黒田光之で、参勤交代の帰途、西鶴を大坂の蔵屋敷に呼び寄せ、世間のことを話させたらしい。

そのような黒田家と西鶴の濃密な関係がある以上、「霧の海四十廷(ママ)立は皆揃へ」の句は、「黒田藩」の小早舟の実景かもしれない。

「四十挺立」の小早舟は、当時和船としては最速の機能をもつ「鯨船」の転用で、参勤交代の際、藩主が御座船に乗り移るために用いたとされる。鯨船は本来的には捕鯨を目的としたが、船足が早いため船団の指揮や連絡当に利用された(『大名の旅』「4　海の参勤交代　「千山丸」解説」徳島市立徳島城博物館、二〇〇五年)。

そうすると、右の句は黒田藩の海の参勤交代の旅の勇壮さを詠み込んでいるのであり、ここまですれば、生玉社の観衆に黒田藩の人々も招待されていたのではないかと想像したくなる。

『西鶴大矢数』に「小早舟」の句は他にもある。

月をのせて小早といふ物急せたり　(巻一第五)
波に声して十二廷(ママ)だて　(巻三第三三)

特に「波に声して」の句は前句に「紋所同じ模様の崩れ橋」とあり、これも十二挺立ての小早が伝令として猛然と往復する海の参勤交代の景かもしれない。後句には「申のき月来迎の念仏講」と付けているが、「申のき」は、辞書類に立項されていないものの『前田注』の「語注」が「交代で念仏を唱えて、唱え終わった者が順次退くこと、の意であろう」とするのを受ければ、小早が交代で艪を漕いでいることにつながり、「申のき」と「十二挺」は舟に熟知している人々にはわかる「付合」だったのではあるまいか。

西鶴は『西鶴諸国ばなし』(貞享二(一六八五)年刊)巻二の二「十二人の俄坊主」でも、紀州藩主一行が「加太の

浦あそび」で遭遇した「うはばみ」と戦う際、「十二人乗り」の「小早」を登場させている。また、『日本永代蔵』巻二の四「天狗は家名の風車」でも鯨捕りの「天狗源内」が太地から西宮浜まで「二十挺立」の小早で駆けつける話をあげているが、ちなみにここでは二〇人に交代させない「押しきらせ」という「申のき」の逆の漕艇法もあげている。

この小早舟だけでも西鶴が舟に詳しく、こだわりをもっていることが了解できるであろう。

しかし、小早舟に加えたいのが、『西鶴大矢数』巻二第一二の

（鹿の住所は遊行の寺也）

御朱印の声きく時ぞ月の舟

穐ふく風の袋を二つ

「御朱印」の句である。『前田注』の句意は、

・（前句を、鹿の住所は遊行の寺である、と解して）、その遊行上人に下された御朱印で鹿ならぬ伝馬呼び出しの声を聞く時には、ちょうど大空には月の舟が浮かんでいる。

・（前句を、御朱印だと云う声を聞く時は、ちょうど月の舟が大空に浮かんでいる、と解して）、おりから秋に吹く風が、その朱印の押された菓子袋を二つ吹き上げたのに驚いた。

となっている。『前田注』の「御朱印」の語釈が「将軍または大名が、公文書に朱肉で押した印章」と限定してしまっている以上、句意はこの領域を出ないであろう。『野間注』も「江戸幕府が社寺に朱印状を下付して、その所領を確認した土地を朱印地という。」とし、当時のただならぬ権威である「朱印」に拘泥している。

もちろん、前句の「遊行の寺」とあれば、『前田注』『野間注』ともが指摘する「藤沢市にある時宗の総本山清浄光寺の通称遊行寺」ととるのが一般的かもしれない。特に『前田注』はその前句が「懼ぬれば懸た杓子も動出」としている「杓子」を一遍上人全国廻国の際の「杓子」と考証し、「遊行の寺」との付合としている以上、前句、前々句との句意では藤沢の「遊行寺」とすべきであろう。しかし、「御朱印の声きく時ぞ月の舟」にまで「遊行寺」を利かせるのは無理であろう。

やはり、「御朱印」とあり、「舟」とくれば、「朱印船」に他ならない。「朱印船」も弁才船同様、船種の一つである。朱印船は徳川家康によって創設された渡航貿易船で、『船の科学』では「慶長九(一六〇四)年から寛永一二(一六三五)年までに三五六艘」を数えたとしている。船種としての「朱印船」は、定義しづらいが、絵として残る末次船・荒木船・末吉船からは帆が二つである。これは『船の科学』に載る「神功皇后の軍船」も「遣唐使船」も帆が二つあることから、外洋船の特徴と思われる。鎖国によって国内船に限られ、汎用された弁才船の帆は一つである。これは『和船Ⅱ』にも、朱印船を知らない西川如見が『華夷通商考』(宝永五(一七〇八)年刊)で「二帆ノ諸具旌籏何レモ唐船ニ同シ…」としてシャム船を説明し、朱印船がこの船型名称「ミスツィス造り」であったとするのと通じている。つまり、朱印船は「二帆」が特徴なのである。

そうすると後句の「風の袋」の語注を『前田注』「朱印を押した紙製の袋」、『野間注』「風の神(風伯)が持っている風袋」として、苦しい句意にしようとするが、「風の袋を二つ」を「袋状に孕んだ帆が二つ」とすれば、「朱印船」

の呈となり、氷解する。「穐ふく風」で渡来した特徴ある船影が月明かりの海原に浮かび上がり、物見の声に人々が嬉々としている賑やかな様子が句意なのである。その場合、前句も「遊行寺」を離れて、月のもとで、鹿が昼間は住処を定めず遊行し、疲れ果てて寺で眠る様子となり、そこに遠く「御朱印」という出港を触れる声が聞こえている寂しげな呈となろう。外国貿易で栄えた近き昔を懐古する静から動への移ろいの妙である。

これも聴衆の中に、末吉家などの朱印船時代に風靡した大商人がいて、挨拶を行ったのかもしれない。『西鶴大矢数』には、他にも、

それ朱印移ひやすき下枩　　（巻一第三）

此朱印いざもろこしの人に見せん　　（巻三第二四）

とあるが、これらの句の「下もみじ」（秋）、「もろこし」（異国）は「朱印船」を導いているとしても間違いあるまい。

右のように、西鶴には鎖国以前の船種への思い入れが感じられる。そうなると「異国船」である。『西鶴大矢数』巻一第一には

（石火矢の玉にもぬける露の玉）

異国の舟も大浪の浦

すみよしの神の力を覚たか

と詠まれている。前句の「石火矢」は大砲である。「玉にもぬける」は大砲を発する意であろうから、異国船の咆哮の勇姿になろう。ペリー来航以前に異国船の咆哮など知るよしもないところであるが、『前田注』「語注」に「毎初秋中国・オランダ船が入港の折は、石火矢棒火矢で礼砲を撃つのが慣例であった」とあるように、存外、「異国の舟」と「石火矢」が付合になるほど知られていたのではあるまいか。そうすると、ここでの異国船のイメージはスペインの無敵艦隊などの軍船、船型で言えば、「ガレオン船」のような大型帆船となる。まさに勇姿である。このままではお上に憚られる。

そこで後句においては、そのような見事な異国船も嵐の海ではどうしようもない。これぞ我が国を代表する海の神様住吉社のお力である、という句意にしたのであろう。これも後の「神力誠を以て息の根留る大矢数」の二万三五〇〇句の舞台、住吉社の関係者が来場しており、挨拶したのかもしれない。

『西鶴大矢数』巻一第三にも「初時雨其日は懸る異国舟」とあるが、前句が「はやり吸啜（キセル）に松は煙りて」と南蛮船を思わせ、後句では「三つの宝をぬすまれな風」として謡曲『海人』、幸若『大職冠』の故事に因み、唐船を思わせている。西鶴の自在な大海に浮かぶ舟への原風景が表出されているのである。

鎖国以来、長崎に行かねば見られない船影であるが、西鶴は『日本永代蔵』巻五の一「廻り遠きは時計細工」で長崎を舞台とした話を書き、外国人への思いを随所にあげ、讃えている。挿絵まで唐人貿易の場である。西鶴の外国船への想いは並々ならぬものがあったのであろう。日本沿岸を廻る千石船では物足りなかったのである。そのことが『西鶴大矢数』巻二第一四で詠まれることになる。

（我ガ物か迚も天下の月の影）

阿武丸には初あらしふく
　臣は水鳴をしづめて花の浪

「阿武丸」とは「安宅(あたけ)丸」として史実に記される大型軍船である。『和船』『船の科学』等にも詳しいが、簡潔な『日本国語大辞典』からひく。

寛永一二年(一六三五)将軍家光が造らせた大型軍船。類を絶した巨艦で、長さ一五六・五尺(約四七メートル)、幅五三・六尺(約一六メートル)、深さ一一尺(約三・三メートル)、二人掛りの大櫓百丁立、水夫二〇〇人、推定排水量一五〇〇トン、攻撃力、防御力もまた冠絶していた。船体は日本式と西洋式の折衷構造で、周囲を銅板で包み、矢倉は純日本式の二層造り、内部に大砲、鉄砲を備える。船首の龍頭や三重の天守などは内外とも華麗を極め、日光の東照宮と比肩されたが、余りにも巨大なため、実用に適さず、維持費に窮した幕府によって天和二年(一六八二)解体された。大安宅丸。

この天下の将軍家が巨大船を有してくれている誇りが素直に詠まれたのであろう。ところがそれが廃棄処分となったため、その無念さが後年、先述の『日本永代蔵』巻一の三「浪風静かに神通丸」において、唐金屋庄三郎の巨大艦「神通丸」として登場させることとなったのではあるまいか。そこには、矢数俳諧の「二万三五〇〇」や『好色一代男』世之介の「三七四二人」よろしく、西鶴の大きな記録好きが窺えるのではあるまいか。

この想いは絢爛豪華な、将軍や大名などが乗る大型船、御座船にも向けられている。『西鶴大矢数』巻四第三七で

詠まれている、

乗初の御座が出て行難波より

は、初めて乗る海御座船が、難波の湊から出航して行く勇姿である。

当時、商船は弁才船、軍船は関船という船型が多かった。この船型が御座船である。一時代前の安宅船型より小型ながら快速であった(『和船』)。幕府も大名も、しばしば大坂で船を造らせるなど、大坂は江戸時代、商船、軍船ともに最大の造船地であったのである(『日本の船』)。なるほど『好色一代男』最終章の「好色丸」も「難波江の小島にて新しき舟つくらせて」と現実的な手続きを踏んでいる。その難波江から出来立ての木の香も新しい御座船が大海原に乗り出していくのである。すべてに西鶴の船の句は造詣深いのである。

四　西鶴の海への造詣と原風景

西鶴は海の潮路、潮の満ち干にも詳しく随所に詠み込んでいる。

『西鶴大矢数』巻二第一九から『前田注』の句意とともにあげる。

(旅行の秋はなふなふ俄に)

取梶よ風が替つて月の舟

瀬を忘れたか霧の海づら

・（前句を、旅行する秋には、まあまあ俄に天候が変わることだ、と解して）、そこで、「取梶よ」の命令は、風が急変したので、月の舟が行うのだ。

・（前句を、「取梶よ」と、風が替ったので、月の舟で命令する、と解して）、しかし、それでは、その方向に暗礁のあるのを忘れたのか、霧の立ちこめた海面で。

『前田注』が指摘するように「なふなふ俄に」が謡曲『熊野』からきていることは確かであろう。しかし、「月の舟」を殊更、「天空を海、月の移行を漕ぐ舟に喩えた」と幻想的に捉える必要もなかろう。むしろ、「なふなふ」は俄に風がなくなったか、風向きが変わったかで水夫たちが叫んでいる様子で、「取り舵よ」と指示する声も聞こえる、月明かりのもとでの長閑な帆船での操舵のやりとりであろう。ところが、後句でも同じく操舵のやりとりであろうが、霧中で海面が見えず、潮流を読めずに急接近してくる他船に「取り舵よ」と指示している、海難事故にも繋がる緊迫した場面であろう。同じ操舵でも平時と緊急時の変化をつけているのである。

そのように西鶴の海の道への造詣を前提とすれば、

（年を重ね生の松原詰奉公）　（巻三第二七）

自然の時は海の中道

筆取て少し早書覚たか

とする「中道」は、本来は「生の松原」とともに福岡博多湾の名所ではあるが、潮流としての「道」ではなかろうか。後句は航海上の覚え書きを後継者に指示する船頭の言葉ではなかろうか。『船行要術』『廻船安乗録』（文化七（一八一〇）年刊）、『渡海標的』（天保六年（一八三五）刊）、『廻船用心記』（安政元年（一八五四）刊）等の航海術書と照合すれば氷塊する用語である。その意味では、巻三第三〇「思ふ便もせばき舟路に」も同様で、後句に「足立ぬ神のありさまむごい事」と西宮えびす神を付けることから、周辺の潮路を知る人では常識ではなかったろうか。

そう考えると、何気ない平穏無事な句に思える

風も立ず波も静かに周防灘　（巻三第三一）

の場合も、帆船を操舵する側からは難所を意味しているかも知れず、後句「しらぬ小哥を爰でよまふか」も別の句意があるかも知れない。

他でも再考は求められる。たとえば、巻三第二五の句である。『前田注』の句意とともにあげる。

（日向の国まで旅の思ひ出）
搗米に味曽（ママ）を添たる海はしほ
入大工なり磯の松かぜ

・（前句を日向の国まで行く旅の思い出は、と解して）、それは、搗米に味噌を添えて携行し、海からは塩分を採ったことだ。

・（前句を搗米に味噌を添えて携行し、海は潮の流れを眺めている、と解して）、それは入大工で、磯の松風を聞きながら歩いているのだ。

この場合、「海はしほ」が難解であるが、『前田注』の後句の解釈にあるように、「しほ」は「塩」ではなく、「潮」として語の意味を解すべきであろう。そうなると一句では、気づかなかった「潮流」の早さへの驚きと感激と解すべきであろう。「日向の国までの楽しい旅の思い出は、見事な照りを見せる搗きたての白米の握り飯に焼き味噌をつけて舟上で食したことだ、おいしさに夢中になっていると、瀬戸内の潮流にうまくのり、あっという間の旅であった」というような句意とし、西鶴の潮路の利便性を讃える句とすべきではなかろうか。後句の「入大工なり磯の松かぜ」は、よく引かれる『大坂檀林桜千句』延宝六（一六七八）年「器用はだなる袖の玉章〈益友〉入大工ゆきてはかへりかへりては〈益翁〉」とあるように、「磯に松風が吹きつける中、潮の流れがよくなり、ようやく入大工（手間賃で雇われた臨時大工）が携行食を持って駆けつけてくれたよ」という句意であろう。潮路、潮の満ち干とも知る人ぞ知るなのである。

以上分析してきたような海の道と海船の句は西鶴の原風景とともに、西鶴と船で結ばれている俳諧仲間、日常の多くを海と船を住処として流通業を営んできた人々たちへの符牒にも似たメッセージとなっているのではなかろうか。これをもって、「西鶴大矢数」興行の挨拶を地方談林俳諧文化圏の中心的人物たちに行っているのではないかと結論するのである。

五　おわりに代えて

慶長元(一五九六)年、山形藩初代藩主「最上義光」は、「何船連歌百韻」を巻いている。戦国武将の中で最も連歌を嗜んだ一人である義光は、当時配流中の里村紹巴の代わりに里村昌叱、里村玄仍、友益を迎え、最上家臣団でも指折りの連歌人を加えた文化のレベルの高い連衆であった。最上勢は朝鮮に赴かなかったものの、それなりの軍船や海船も知り尽くしていたはずであるが、百韻には「海人小舟」「川舟」という語はあっても、船上、海原を詠んだと思しき句は見当たらない。ましてや船に関わる専門用語など使われていない。おそらく、上級武士には操舵や船の名称などに興味がなかったのであろう。しかし、そのような身分の違いだけでなく、連歌と俳諧の詠じ方に違いがあるとはいえ、『西鶴大矢数』には西鶴の海と舟の原風景を詠み込んだ句が多すぎると言ってよい。

ただ、本来なら、ここには海船だけでなく、川(湖・池も含む)舟の句を分析しなくてはならない。一例だけでもあげてみれば、

乗合の舟の出ぬ間に髪そらう　(巻一第四)
ぬるむ水行高瀬の便り　(巻一第一〇)
一文おしまぬ淀川の末　(巻二第一七)
一本の竿をさしては働ひたり　(巻二第一八)
くだり月舟は乗合夜は明て　(巻三第二四)
花舟や手のひら程な筵の上　(巻三第二八)

梶取が舟と答えて下り舟　（巻四第三七）

というものであるが、各々物語性を含み、経験則の海船より川舟の方が故事や古典に関係しているが、別の機会を得たい。

また、本稿において、「船」と「舟」が混在しているが、原文自体が混同しているので拘泥しなかった。無頓着であったわけではないが、何か法則性があるのか検証すべきかも知れない。

海船についても、検証の足らない箇所はある。例えば、「雲静かなるさぬきの金昆羅」（巻一第二）の場合、すでにこの時期、「金比羅船」による金昆羅参詣が行われていたのか、「金比羅船」とはいかなる船型か、といった宗教史と海運史からの謎解きが必要となってくる。

さらには、「雨にあらしに舟間也けり」（巻二第一一）と詠む「舟間」などの風待ちの実態や、「いつ夜ぬけ片帆にかけて何国へか」と詠む「片帆」の和船における操舵法などを知るための基礎調査資料の洗い直しと言った手続きも問題として残った。

何よりも「俳」の精神による矢数俳諧をこのような理詰めで句意をとる必要があるのかという根本的な懐疑があるが、これは些か、『天満千句』や『西鶴俳諧大句数』などを通して、談林俳諧独自の詠み方として提出して論ずべきものと準備を急いでいる。

最後に大きな課題とも結論ともいうべきことが一点ある。

『西鶴大矢数』巻一「役人」から知る「西鶴大矢数」興行に名を連ねる俳人は、今となっては未詳とされる場合が多いが、判明している者の中に当日、明らかに遠方より駆けつけたと判断できる俳友はほとんどいないと言える。

多くは大坂三郷を中心とした近郊であることから、せいぜい利用しても川舟程度であったろう。反面、「西鶴大矢数」四〇〇〇句に表八句六七組を追加して『西鶴大矢数』巻五として刊行した中に所収される句の作者たちには、海を隔てた遠方の俳友を多く載せている。これは何を意味しているのであろうか。それはやはり、西鶴が『西鶴大矢数』において海と舟の原風景を詠み込むことが、先述の地方談林俳壇の人々へのメッセージとなっている裏付けではないかと提言したい。遺憾ながら、ここでひとまず与えられた紙幅を終え、他日の別稿で検討することを誓って、本稿を終えたい。

※本稿は文部科学省科研基盤研究(C)課題番号「24520252」(森田雅也代表)「科学研究　地方談林俳諧文化圏の発展と消長〜西鶴の諸国話的方法との関係から〜」の研究助成及び、二〇一一〜二〇一三年度関西学院大学共同研究A(森田雅也代表)の一連の「海洋文化と島国文化の生成研究」の研究助成を受けている。

執筆者紹介（掲載順、＊印は編者）

①経歴・所属　②主な著書・論文

中嶋隆（なかじま　たかし）＊

一九五二年生まれ。①早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。博士（文学）。早稲田大学教育・総合科学学術院教授。②『新編西鶴と元禄メディア』（笠間書院、二〇一一年）、『初期浮世草子の展開』（若草書房、一九九六年）、『西鶴と元禄文芸』（若草書房、二〇〇三年）ほか。

塩崎俊彦（しおざき　としひこ）

一九五六年生まれ。①上智大学文学研究科博士後期課程満期退学。高知大学総合科学系地域協働教育学部門教授。②「貞室自筆『貞徳終焉記』について」（『連歌俳諧研究』九八号、二〇〇〇年）、「金毘羅風雅抄」（岩波書店『文学』第一七巻第二号、二〇一六年）ほか。

早川由美（はやかわ　ゆみ）

一九五九年生まれ。①奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了。博士（文学）。愛知淑徳大学文学部非常勤講師。②『西鶴考究』（おうふう、二〇〇八年）、『忠臣蔵　第2巻』（共著、赤穂市、二〇一一年）、『諸注評釈新芭蕉俳句大成』（共著、明治書院、二〇一四年）ほか。

尾崎千佳（おざき　ちか）

一九七一年生まれ。①大阪大学文学研究科博士後期課程単位取得退学。山口大学人文学部准教授。②『西山宗因全集』第一巻～第五巻（共編著、二〇〇四年～二〇一三年、八木書店）、「宗因顕彰とその時代」（『連歌俳諧研究』九七号、一九九九年）、「『肥後道記』の典拠と主題」（『近世文芸』二〇〇八年七月）ほか。

森田雅也（もりた　まさや）

一九五八年生まれ。①関西学院大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。博士（文学）。関西学院大学文学部教授。②『西鶴浮世草子の展開』（和泉書院、二〇〇六年）、西鶴影印叢書『西鶴諸国はなし』（編著、和泉書院、一九九六年）、『新編西鶴全集第三巻』（共著、勉誠出版、二〇〇三年）、中嶋隆編『二十一世紀日本文学ガイドブック　井原西鶴』（分担執筆、ひつじ書房、二〇一二年）、『島国文化と異文化遭遇』（編著、関西学院大学出版会、二〇一五年）ほか。

深沢眞二（ふかさわ　しんじ）

一九六〇年生まれ。①京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。和光大学表現学部教授。②『「和漢」の世界―和漢聯句の基礎的研究―』（清文堂出版、二〇一〇年）、『旅する俳諧師―芭蕉叢考二―』（清文堂出版、二〇一五年）ほか。

ダニエル・ストリューヴ（Daniel Struve）

①一九五九年生まれ。パリ・ディドロ大学教授。CRCAO（東アジア文明研究センター）研究員。②『『源氏物語』箒木巻を通して見る物語観』（寺田澄江他編『物語の言語』青簡舎、二〇一三年）、「断片としての「文」―西鶴と書簡体物語―」（国文学資料館、コレージュ・ド・フランス編『集と断片』勉誠出版、二〇一四年）、「西鶴晩年の好色物における「男」の姿と機能」（国文学研究資料館編『アジア遊学195　もう一つの日本文学史―室町・性愛・時間―』勉誠出版、二〇一六年）ほか。

大木京子（おおき　きょうこ）

一九七〇年生まれ。①青山学院大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。青山学院大学非常勤講師。②『近世文学の展開』（共著、関西学院大学出版会、二〇〇〇年）、『西鶴選集　西鶴名残の友』（共著、おうふう、二〇〇七年）、『江戸文学からの架橋』（共著、竹林舎、二〇〇九年）ほか。

有働裕（うどう　ゆたか）

一九五七年生まれ。①東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了。愛知教育大学教育学部教授。②『西鶴　はなしの想像力』（翰林書房、一九九八年）、『「源氏物語」と戦争』（インパクト出版会、二〇〇二年）、『西鶴と浮世草子研究　Vol. 2 怪異』（共編、笠間書院、二〇〇七年）、『これからの古典ブンガクのために』（ぺりかん社、二〇一〇年）、『西鶴　闇への凝視―綱吉政権下のリアリティー―』（三弥井書店、二〇一五年）ほか。

染谷智幸（そめや　ともゆき）

一九五七年生まれ。①上智大学大学院文学研究科博士前期過程修了。博士（文学）。茨城キリスト教大学文学部教授。②『西鶴小説論―対照的構造と〈東アジア〉への視界―』（翰林書房、二〇〇五年）、『韓国の古典小説』（共編、ぺりかん社、二〇〇八年）、『新編西鶴全集　第3巻』（共著、勉誠出版、二〇〇三年）ほか。

永田英理（ながた　えり）

一九七七年生まれ。①早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士（学術）。白百合女子大学、武蔵野大学、早稲田大学非常勤講師。②『蕉風俳論の付合文芸史的研究』（ぺりかん社、二〇〇七年）、『連歌辞典』（共著、東京堂出版、二〇一〇年）、『『おくのほそ道』解釈事典―諸説一覧―』（共著、東京堂出版、二〇〇三年）ほか。

大野鵠士（おおの　こくし）

一九五〇年生まれ。①岐阜女子大学大学院文学研究科修士課程修了。獅子門（美濃派）道流第四一世。②『西鶴　矢数俳諧の世界』（和泉書院、二〇〇三年）、『連句―学びから遊びへ―』（共著、おうふう、二〇〇八年）ほか。

デイヴィッド・アサートン（David Atherton）

一九七八年生まれ。①コロンビア大学東アジア言語文化学部博士課程終了。博士。コロラド大学ボルダー校アジア言語文明学部助教授。②"Valences of Vengeance: The Moral Imagination of Early Modern Japanese Vendetta Fiction," Columbia University PhD dissertation.

篠原進（しのはら　すすむ）＊

一九四九年生まれ。①青山学院大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。青山学院大学教授・副学長。②『新編西鶴全集　第一巻』（共著、勉誠出版、二〇〇〇年）、「怒れる小町―西鶴1686―」（『文学・語学』215号・二〇一六年四月）ほか。

佐藤勝明（さとう　かつあき）

一九五八年生まれ。①早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。博士（文学）。和洋女子大学人文社会科学群教授。②『芭蕉と京都俳壇』（八木書店、二〇〇六年）、『芭蕉全句集』（共著、角川ソフィア文庫、二〇一〇年）、『松尾芭蕉と奥の細道』（吉川弘文館、二〇一四年）ほか。

ことばの魔術師西鶴

——矢数俳諧再考

Saikaku the Wizard of Words:
New Approaches to His "Yakazu Haikai"
Edited by Nakajima Takashi and Shinohara Susumu

発行　二〇一六年一一月一〇日　初版一刷
定価　七八〇〇円＋税
編者　©篠原進・中嶋隆
発行者　松本功
装丁者　萱島雄太
印刷所　三美印刷株式会社
製本所　株式会社星共社
発行所　株式会社ひつじ書房
〒一一二-〇〇一一
東京都文京区千石二-一-二 大和ビル二階
Tel. 03-5319-4916　Fax. 03-5319-4917
郵便振替 00120-8-142852
toiawase@hituzi.co.jp　http://www.hituzi.co.jp/
ISBN978-4-89476-785-0　C3091

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などがございましたら、小社かお買い上げ書店にておとりかえいたします。
ご意見、ご感想など、小社までお寄せ下されば幸いです。